

# 令和7年度 アーツ前橋事業評価調書(1)

資料 2-(1)

基本事項	事業名	ゴースト 見えないものが見えるとき												
	会期	2025/9/20-12/21						開館日数	80 日間					
	会場(ギャラリー)	ギャラリー(1F+地下)						実施方式	01自主企画・単独方式					
	観覧料	一般	1,000 円			出品点数	104点							
		割引	800 円											
	担当者	南條史生、井波吉太郎、武田彩莉、出原均、庭山貴裕												
	目的(一覽表)	死者の霊のほか、土地に宿る霊、歴史にまつわる霊、現代の人工知能(AI)や仮想現実(VR)などにより仮想空間に現れる霊など、私たちを取り巻きさまざま「ゴースト」を、絵画、彫刻、写真、映像、インスタレーションなど多様な表現を通して紹介し、見えるものと見えないものが生み出す謎めいた魅力を探る。												
	キーワード	幽霊、亡霊、精霊、地霊、歴史的記憶、AI、VR、赤城山、萩原朔太郎												
	他団体との連携(共催、協力等)													
	参加作家	アピチャップボン・ウィーラセタクン+チャイ・シリ	クリスチャン・ボルタンスキー	daisydoze	ヒグチユウコ									
平田尚也		ハラール・サルキシアン	岩根愛	丸木位里・俊										
松井冬子		諸星大二郎	マームとジブシー	新平誠洸										
西太志		丹羽良徳	尾花賢一+石倉敏明	諏訪敦										
竹村京		トニー・アウスラー	山内祥太	横尾忠則										
関連イベント		①オープニング・トーク(出演トニー・アウスラー、山内祥太、南條史生):9/20 ②南條史生特別館長によるギャラリートーク:9/28、12/7 ③学芸員によるギャラリートーク:9/27、10/18、11/29 ④おしゃべりアートデイズ:10/11、11/8、12/13 ⑤田中俊行×都市ボーイズ×アーツ前橋 スペシャル怪談:11/29 ⑥トニー・アウスラー 屋外プロジェクション:12/13												
① 投入(支出)・③ 結果(収入)	印刷物等	ポスター(B2)	チラシ(A4)	館内マップ	セルフガイド	リーフレット	図録							
		900 部	40,000 部				1,000 部							
	収入/支出	収入(A)	支出(B)	収支比率(A)/(B)	入館者一人当たりコスト	収入内訳								
						観覧料	助成金	他						
		予算	24,500,000 円	37,753,380 円	64.9%	4,719 円	6,500,000 円	18,000,000 円						
		決算見込	22,954,600 円	34,492,406 円	66.5%	2,791 円	6,114,600 円	16,840,000 円						
差額	-1,545,400 円	-3,260,974 円	1.7%	-	-385,400 円	-1,160,000 円	0 円							
予算/決算	93.7%	91.4%	102.6%	59.1%	94%	94%	#DIV/0!							
② 内容・活動	[②内容] 事業の概要	事業の概要(転記)	ゴーストというキーワードから広がる複数の視点から、絵画、彫刻、写真、映像、漫画、インスタレーション、AIやVRを使用した作品等100点強を展示紹介した。また、前橋にまつわる作品として、尾花賢一+石倉敏明が赤城山の伝説に取材した作品や、daisydozeが市街地の歴史(生糸産業および萩原朔太郎の足跡)をリサーチして制作したサウンドイマーシブシアター(ヘッドフォンの音声の導きにより市街地を巡る)を会期中毎日実施した。											
		・広報戦略 ・新たな試み(転記)	・怖い話が近年流行中であり、アートのみならず広くホラー・ファン等にも訴求するよう、漫画等も含めた幅広いジャンルの作家を選定したほか、YouTube等で人気の怪談師によるイベントや屋外プロジェクション等、様々な層の来場・関心を集める関連イベントを実施した。 ・TikTok、Instagramなどを中心に活躍するアート系インフルエンサーによる展覧会取材・発信を行い、若い年齢層にもリーチする広報を試みた。											
		広報実績[新規掲載や効果が大きかった媒体など、特別な案件]	・上毛新聞、読売新聞、毎日新聞、朝日新聞等で展評・紹介記事が掲載されたほか、美術手帖、TOKYO ART BEAT等の美術・カルチャーメディアでweb紹介された。 ・館のX、Instagramは会期中にフォロワーの大きな増加が見られた。 ・怪談師によるイベントでは、当館YouTubeアカウントで公開したアーカイブ映像は5.7万回再生(2月現在)と大きな反響があった。											
③ 結果	入場者数(参考数値) 上段:人数(人) 下段:割合(%) ※色付きは有料観覧者	一般	学生	65才以上	団体	高校生以下	障害者	招待券	割引等	他	イベント	合計(人)	日平均(人)	
		5,414	513	282	58	975	463	968	10	4,334	319	12,358	154	
	43.8%	4.2%	2.3%	0.5%	7.9%	3.7%	7.8%	0.1%	35.1%	2.6%				
	一般指標	指標	目標値	達成値	達成率	特記事項								
入場・参加者数		8,000 人	12,358 人	154.5 %										
展覧会満足度		80 %	91.3 %	pt	アンケートに、「満足」、「やや満足」と記入があった割合(無回答を除く)									

## 令和7年度 アーツ前橋事業評価調書(2)

③ 結果	事業名	ゴースト 見えないものが見えるとき			
	進捗管理 [スケジュール観]	A.概ね円滑に進んだ ②B.遅延気味であった			
④ 成果	[④成果] 一覧表の「目標」に対する結果 ・観覧者層のターゲット ・ねらい	観覧者層のターゲット	前橋市内外のアート、ホラーの愛好者、10～30代		
		成果	アンケート結果から推測される来場者の年代は20代が27%で最も多く、次いで30代が17%、10代が15.0%で、比較的若い年齢層が多く来場した。来場者の住まいは県外が36%、県内が32%、市内が30%で、県外からの来場者も多かった。また、来館回数は、当館にはじめて来館した方が60%であり、本展により新規来館者の獲得ができたといえる。		
		ねらい1 (転記)	多様なメディアム、テクノロジーを通して過去から未来までのゴーストの表現に触れてもらう		
		成果	諏訪敦、松井冬子、丸木位里・俊の絵画作品のほか、尾花賢一・石倉敏明のインスタレーション、平田尚也のVR作品、諸星大二郎の漫画原画、ヒグチユウコのイラストレーションやポスター、トニー・アウスラーの映像作品等を面白く見たという声が多く寄せられた。概ね肯定的なコメントが多く、アンケート結果では高い満足度(91.3%)を得た。		
		ねらい2 (転記)	前橋の地域史に目を向けた作品の展開		
		成果	尾花賢一・石倉敏明が赤城山の伝説に取材した《火山娘たちのドリーミング》や、daisydozeが市街地の歴史をリサーチして制作したサウンドイマーシブシアター《糸町》など、市内外に来場者が赤城山や前橋史の歴史や民俗を知り、館内外を巡る機会を提供できた。		
⑤ 波及効果	個別評価 ※記入日を( )内に入れてください ※概ね1年経過毎に再確認して修正	<1～5は、記入項目の例・無い場合は削除。独自の評価項目の設定可。記入日を記載> 1参加作家のその後の活動を評価 ⇒後日記入			
		2. アーツの事業に対して、誰がどのような価値を見出したのかを評価 ⇒アンケートの回答では、著名な作家を前橋で見られたことを喜ぶ声が多く寄せられた。また、展示内容についても「美術に閉じない良いキュレーションだった」といった回答など、概ね好評を得られた。来場者ならびに当館に初めて来た人の割合の多さから、美術ファンのみならず多様な関心層に当館を認識してもらおう一助となったと思われる。			
		3. 事業関係者(作家、運営、イベント参加者、地域住民)たちとの間で生まれた交流やその後の関係性の構築を評価 ⇒後日記入			
		4. 事業の実施に伴う波及効果 ⇒ミュージアムショップでは出品作家の関係書籍、グッズ、公式図録を販売したが、売れ行きも良く、ショップの売り上げに貢献できたといえる。			
		5. 地域資源の活用という点での効果 ⇒尾花賢一・石倉敏明作品は地域史・民俗の掘り起こし、daisydozeのサウンドイマーシブシアター《糸町》は萩原朔太郎などの地域資源に加えて市街地の空き店舗や景観活用の企画である点で好意的に受け止められ、今後同種の企画を行う上での足掛かりとなった。			
自己評価 (担当者)	効率性 ①:③ 事業が効率的だったといえるか	1.非常に良い	2.良い	③普通	4.劣る
	合目的性 ②:④ 事業の目的を達成したといえるか	1.非常に良い	②良い	3.普通	4.劣る
	事業の将来性 ②:⑤ 館の事業に対し将来性があるか	1.非常に良い	②良い	3.普通	4.劣る
	社会的将来性 ③:⑤ 社会への影響に将来性があるか	1.非常に良い	②良い	3.普通	4.劣る
	課題・改善点	・海外作家を含む20組の作家との調整、作品借用等を数名のスタッフで行う必要があり、業務過多・作業の遅延が発生した。会場設営では、複数の作家の設営が同時進行することとなった。また、大掛かりな映像や砂・土など自然物を使用した造作の設営などに臨時的スタッフ応援が発生するなどしたため、今後はより綿密な段取り・スケジュール管理に努めたい。 ・VR、AIを使用した作品の不具合が会期中にたびたび起こったため、今後はより綿密にマニュアル作成と監視スタッフへの共有等を行う必要がある。			
引継ぎ事項 (特記事項)					
コメント・意見	館長 副館長	多彩な作家の多様な作品を紹介した本展は、様々な層に新しい鑑賞体験を提供できた。SNS発信や怪談イベントなど、従来の枠を超えた広報・企画も若年層へのリーチに成功し、高い満足度と来場者数につながった。一方で、多数の作家調整やVR・AI作品の運用など、スタッフ負担が大きかった点は改善の余地がある。総じて、当館の新たな可能性を示す展覧会となった。			
	運営 評議会				